

白山ふるさと文学賞

第十四回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁鳥敏部門】〈作文「母へのおもい」または「家族へのおもい」〉

小学生5・6年の部 最優秀賞

「私の世界一の宝物」

北陽小学校六年

楠くすのき

美海み

私の世界一の宝物は家族です。毎日、笑い声や時にはケンカが絶えないけれど、それでも私にとつてかけがえのない存在です。家族と過ごす時間は、どんな宝石よりも輝いていて、心が温かくなります。

お母さんはいつも忙しく家事をこなしながら、温かいご飯を作ってくれます。学校の宿題でわからないところがあると根気よく教えてくれて、難しくてイライラするときも優しく支えてくれます。そんなお母さんの優しさに、私は毎回救われています。

たとえば、ある日の夜、算数の問題がどうしてもわからなくて、「もうやりたくない！」と怒ってノートを投げてしまつたことがあります。そんな私にお母さんは、「大丈夫、一緒に考えよう」と言つて何度も教えてくれました。私は自分が怒つてしまつたことが恥ずかしくなり、途中で涙が出てきました。でもそんな私をお母さんは何も責めずにそつととなりに座つてくれました。その静かな優しさに、私はだんだん落ち着いてきました。あのとき、お母さんはただ勉強を教えてくれたんじゃなくて、私の気持ちにもしっかりと向き合つてくれていたんだと感じました。

ご飯のときも、いつもみんなが好きなものを考えてメニューを決めてくれます。カレーの日には「今日のじやがいも、ちょっと大きすぎたかな」なんて笑いながら話してくれるのも、なんだかほつとする時間です。私はそのカレーを食べながら「このあたたかさも、全部お母さんのお手から生まれてるんだな」と思いました。あたりまえじやないことを、お母さんはたくさんしてくれます。

お父さんは、毎日仕事で帰りが少し遅めです。早く六時台、遅いときは十時台に帰つてくることもあります。お父さんは仕事で疲れているはずなのに、私が「買い物に行きたい！」と言うといつもスーパーに連れてってくれます。一緒にお菓子を選ぶ時間やアイスを選ぶ時間は、なんでもないようで楽しいひとときです。

この前も、お父さんが妹とお母さんの分のジュースを買つていまし

た。そんなところにお父さんの優しさや家族思いな一面を感じました。話す頻度や言葉は少なくとも、ちゃんと私たちのことを考えているのが伝わってきて私はすごく嬉しくなります。

妹とは、毎日これでもかというくらいケンカばかりしています。私が妹のお菓子を少しもらおうとしたら「ダメ！絶対あげない」と言うのに、私のお菓子をあげなかつたらすぐ泣くしあげたとしても文句ばっかり。正直「もう知らない！」って思うこともあるけど心のどこかではずっと妹のことを気にしている自分がいます。

前に私が落ちこんでいたときに何も言わずにそつとビーズのブレスレットをくれたことがあります。ただのカラフルなビーズだけど「元気出して」って言葉がこめられているような気がして、思わず笑つてしましました。「どんなにたくさんケンカしても妹のこと、きらいになんてなれるわけないな」そう思つたのを今でも覚えていいます。

家族は、ときには面倒に感じることもあります。話を聞いてほしいときにはかぎつて誰も話を聞いてくれなかつたり、せつかくいい気分だったのにちよつとした一言でケンカになつたりうるさいなつて思うときもあるし、思い通りにならないことの方が多いかも知れないけれどそれでも私は家族といふ時間がなにより大切で、やつぱり家族が世界で一番好きなんだと思います。

まだまだ子どもの私は、家族に支えてもらうことのほうが多いけど、少しずつでも何か恩返しをしていけたらいいなと思つています。「ありがとう」つてちゃんと伝えられる自分でいたいし、誰かがこまつているときには、そつと寄りそえる人になりたいです。これからも、この家族といつしょに、たくさん思い出を作つていきたいです。

たとえば、家族そろつて出かける日曜日の朝。行き先を決めるまでにみんなでワイワイ話したり、車の中で好きな音楽をかけながらおしゃべりしたり、そんな何気ない時間さえも私にとってはすごく大切です。

目的地に着く前から、もう楽しい思い出がたくさんできていることがあります。

ふつうのように見えるけれど、実は特別な時間です。

家族がいるからこそ安心して笑えるんだと思います。

家族と過ごす毎日は、時に笑いがあふれ、時に小さなケンカもあるけれど、そんな日々が私を成長させてくれていると思います。いつか、大人になつたときに、今この大切で幸せな時間を思い出して、家族のありがたさや温かさを心から感じられるように、毎日を大事に過ごしていきたいと思いました。

世界一の宝物、それはやっぱりこの家族です。

